

## 日本赤十字九州国際看護大学学術情報リポジトリ

タイトル	看護学実習前演習への模擬患者(simulated patient: SP)導入による学生の学びの実際 : 学生の体験・気づきから生じた変化に着目して
著者	小手川良江, 阿部オリエ, 本田多美枝, 柳井圭子, 宇都宮真由子, 中平紗貴子, 田中千晴, 金丸多恵
掲載誌	日本赤十字九州国際看護大学紀要, 12 : pp 47-56.
発行年	2013.11.29
版	publisher
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1127/00000293/">http://id.nii.ac.jp/1127/00000293/</a>

### <利用について>

- ・本リポジトリに登録されているコンテンツの著作権は、執筆者、出版社(学協会)などが有します。
- ・本リポジトリに登録されているコンテンツの利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲内で行ってください。
- ・著作権に規定されている私的使用や引用などの範囲を超える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。
- ・ただし、著作権者から著作権等管理事業者(学術著作権協会、日本著作出版権管理システムなど)に権利委託されているコンテンツの利用手続については各著作権等管理事業者に確認してください。

## 報告

### 看護学実習前演習への模擬患者(simulated patient: SP)

#### 導入による学生の学びの実際

#### —学生の体験・気づきから生じた変化に着目して—

小手川 良江<sup>1)</sup> 阿部 オリエ<sup>1)</sup> 本田 多美枝<sup>1)</sup> 柳井 圭子<sup>1)</sup>  
宇都宮 真由子<sup>1)</sup> 中平 紗貴子<sup>1)</sup> 田中 千晴<sup>1)</sup> 金丸 多恵<sup>1)</sup>

本研究の目的は、実習前演習に地域住民がSPとして参加することによって学生がどのような学びを得ているのかを明らかにすることである。看護過程の展開実習前演習に参加した学生125名を対象に自記式質問紙調査を実施した。演習に参加した125名のうち、研究協力に同意が得られた106名の回答を分析対象とし(回収率は84.8%、有効回答率は100%)、質問紙の自由記述について質的内容分析を行った。その結果、SPが演習に参加することによる学生の体験として【臨床に近い体験】【模擬患者からの反応をつきつけられる体験】【思い通りにならない体験】の3つのカテゴリと7つのサブカテゴリが抽出され、体験による学生の気づきとして、【実体験からの発見】【模擬患者の反応による気持ちの変化】【自己の課題の発掘】の3つのカテゴリと12のサブカテゴリが抽出された。また、SPが演習に参加することによる学生の変化としては、【視野の広がり】【学習意欲の向上】の2つのカテゴリと5つのサブカテゴリが抽出された。

以上より、学生はSPが演習に参加することによって看護のリアリティを疑似体験し、その体験によって学生は感情を揺さぶられ、多くの気づきへとつながっていた。また、これらの体験や気づきから学生には様々な変化が起こることが明らかとなった。今後は本研究を基に演習の方法と学生の学びの関連について学生にインタビューを行い、SP参加型教育が学生の学びにどのような影響を与えているのかを明らかにし、本学におけるSP参加型教育の指針を明確化することが課題である。

キーワード：模擬患者 (SP)、 地域住民、 実習前演習、 看護学生

## I はじめに

近年、看護基礎教育における看護実践能力の育成が求められており、様々な取組みが行われている。取組みの一つとして「模擬患者」(Simulated Patient、以下SPとする)参加型の教育方法が取り入れられている。本田らは、SPの導入は、再現可能かつリアリティに近い学習状況を創り出すため、患者に関わる以前の、段階的かつ実践的学習を促す教育方法として期待されている<sup>1)</sup>と述べている。しかし、同時に、SP参加型教育には、課題が多いことも指摘されている。その課題とは、SP導入自体、看護基礎教育においては歴史が浅いこと、本来、SPとは「訓練を受けた健康人」と定義されているが、看護基礎教育におけるSP導入は、必ずしも訓練を受けた一般市民がSPを担っている状況に

はないこと<sup>2)</sup>、SPである教育ボランティアと全ての学生が十分な時間関わることができないこと<sup>3)</sup>などが挙げられている。しかし、学生は学内にいながら臨場感をもって学習に取り組むことができ、人間関係の形成や対象にあった看護について考えることができる<sup>4)</sup>との報告もあり、SP参加型の教育には課題もあるが、学生にとって学生同士の演習とは違う学びができていると考えられた。

本学においても、本格的な実習の前段階として、2年次前期に看護過程の展開実習前演習を実施している。看護過程の展開実習は、学生が病院で対象者を初めて受け持ち、看護過程を展開するという実習である。この実習前にSPを導入した演習をH20年から実施している。SPは、地域のコミュニティを通して集まっていた地域住民の方々であり、状況を設定しSPを演じ

1)日本赤十字九州国際看護大学

てもらう。SPを導入することで地域住民・学生それぞれに効果があるのではないかと感じ、SPと学生双方にどのような教育的効果があるのかを解明することを目的にH23年より研究に取り組んでいる。

H24年には、看護学実習前演習に地域住民が模擬患者として参加することの意義を明らかにした<sup>5)</sup>が、本研究ではこれを踏まえ、看護過程の展開実習前演習に参加した学生を対象とし、実習前演習に地域住民がSPとして参加することによって、学生がどのような学びを得ているのかを明らかにすることを目的とした。

## II 用語の定義

模擬患者(SP)：地域のコミュニティを通して集まっていた50～70歳代の健康な地域住民。事前に患者の状況と実際の援助に対しての率直な反応を返してもらうように説明を受けた人。

## III 研究方法

### 1. 研究デザイン

実習前演習に地域住民がSPとして参加することによって学生がどのような学びを得ているのかを明らかにすることを目的に質的記述的研究を行った。模擬患者を導入した看護実践やディスカッションについて無記名自記式質問紙調査を行い、自由記述について質的内容分析を行った。

### 2. 看護過程の展開実習前演習の方法

看護過程の展開実習前演習は、対象者のニーズを捉え状況に応じた看護を実践し評価することと、自己の課題を明確にすることを目的としている。本演習では「看護過程」(2年前期)の授業で学生が看護過程を展開した「左大腿骨頸部骨折、介達牽引中である70歳代の女性」の事例を使い、看護過程の「第一段階：アセスメント」から「第五段階：評価」までの一連を実習前に学生が経験できることを狙った。看護過程の「第四段階：実施」についてはSPを導入し、臨床に近い状況で看護実践ができるように計画した(表1)。

今回の演習では事例に「汗をかいて気持ちが悪い」という場面を提示し、「看護援助について立案した援助計画を基に、看護実践場面のロールプレイを行う」ことを学生の課題とした。そのロールプレイの場面に患者役としてSPを導入し、学生はSPに対して背部清拭と寝衣交換を実施した。SPには、患者の状況と想定される援助内容に加え実習前の演習であることを説明し、

セリフが決まっているのではなく、学生の援助に対して感じたままの率直な反応を自由に返してもらうように伝えた。また、ロールプレイ後に援助を受けてどのように感じたのか等のフィードバックを依頼した。

表1 SPを導入した実習前演習の概要

時間	内容
10分	ガイダンス
5分	<1回目> 援助の目的・内容・根拠について説明
25分	模擬患者への看護実践
25分	ディスカッション 模擬患者からのフィードバック
10分	休憩
5分	<2回目> 援助の目的・内容・根拠について説明
25分	模擬患者への看護実践
25分	ディスカッション 模擬患者からのフィードバック
30分	演習の目的・目標に対する振り返り 質疑応答(担当教員) 技術練習等

### 3. 対象者

A 看護大学の看護過程の展開実習前演習に参加した学生125名に対して、研究の目的や方法などを口頭と書面で説明を行い、研究に同意した106名を対象とした。

### 4. データ収集方法

#### 1) 調査時期

平成23年7月29日、演習終了後に実施した。

#### 2) 方法

調査は無記名自記式質問紙調査とし、模擬患者を導入した看護実践やディスカッションについて焦点を絞って調査を行った。模擬患者を導入した演習について印象に残った体験、模擬患者を導入した演習での体験から感じ考えた事、学びをどのように活用するか等の項目について自由に記述してもらった。演習終了後に、研究の主旨を説明し質問紙の提出をもって同意とした。

### 5. データ分析方法

自由記述欄の模擬患者を導入した演習について印象に残った体験、模擬患者を導入した演習での体験から感じたり考えた事、学びをどのように活用するかにつ

いて記載している箇所を文脈を損なわないように留意してデータとして取り出し、研究者間で質的内容分析を行った。取り出したデータは意味内容の類似性・相違性に着目して、コード化、サブカテゴリー化、カテゴリー化を行った。その後、カテゴリー間の関連性について分析を行った。分析にあたっては、研究者間で繰り返し検討を行い、結果の信頼性・妥当性を確保できるようにした。

## 6. 倫理的配慮

口頭と文書にて研究の主旨と本研究が成績とは無関係であることを説明した。個人が特定されないように質問紙は無記名とし、質問紙の提出にて同意とした。教員が学生に行う研究であり、強制力が働かないように質問紙配布後は教室から退室し回収箱への提出とし、学生の自由意思を尊重した。また、本研究に参加しない場合も何ら不利益は受けないことの説明を行った。研究についての質問や異議についての申し出はいつでも受け付けることを説明し、説明文に連絡先を明記し、第三者機関である本学研究倫理審査委員会に異議申し立てができることも記載した。本研究は日本赤十字九州国際看護大学の研究倫理審査会の承認（承認番号11-11）を得て行った。

## IV 結果

### 1. 対象者背景

演習に参加した125名のうち、研究協力に同意が得られた106名の回答を分析対象とした。質問紙の回収率は84.8%、有効回答率は100%であった。

### 2. 結果

#### 1) SPが演習に参加することによる学生の体験

実習前演習にSPが参加することによる学生の体験として【臨床に近い体験】【模擬患者からの反応をつきつけられる体験】【思い通りにならない体験】の3つのカテゴリーと7つのサブカテゴリーが抽出された(表2)。

以下、生成されたカテゴリーを【 】、サブカテゴリーを<>、データを「」で示す。

【臨床に近い体験】では、<臨場感のある体験><イメージとのギャップ><いつもと違う緊張感>を体験していた。

<臨場感のある体験>では、「浴衣の下が裸だった。」  
「相手が女性だったのでプライバシーに配慮すること

表2 SPが演習に参加することによる学生の体験

カテゴリー	サブカテゴリー
臨床に近い体験	臨場感のある体験
	イメージとのギャップ
	いつもと違う緊張感
模擬患者からの反応をつきつけられる体験	模擬患者からのリアルなフィードバック
思い通りにならない体験	援助の難しさを実感
	計画通りにいかない体験
	援助での失敗体験

を実際に体験できた」「バスタオル1枚で身体を覆えると思って練習したが、実際にやってみるとバスタオル1枚では足りずあわててバスタオル2枚と小さいタオルを追加した」などのデータがあった。

<イメージとのギャップ>では「学生とは違う皮膚の感触や体型」「学生の皮膚とは違いハリがなかった」などのデータがあり、高齢者の実際の肌を見たことで、今までイメージしていた肌や体型とのギャップを感じる体験をしていた。

<いつもと違う緊張感>では、「やっぱり緊張するし、(普段の)演習とは違うと思った」「学生同士とは違う緊張感があった」「初めて他人に対して本格的な看護だったので緊張した」という緊張感を表現したデータがあった。

【模擬患者からの反応をつきつけられる体験】では、<模擬患者からのリアルなフィードバック>を体験していた。

<模擬患者からのリアルなフィードバック>では、「私たちの技術がどうであったか詳しく述べてもらった」「熱いや冷たい、聞こえないなどの素直な反応や感想をいただいた」「学生同士では気づかない指摘をしてくれた」など、実際に援助を行った反応を模擬患者から直接聞くという、実施した援助に対して模擬患者から生の声を返してもらうという体験をしていた。

【思い通りにならない体験】では、<援助の難しさを実感><計画通りにいかない体験><援助での失敗体験>を体験していた。

<援助の難しさを実感>では、「患者の気持ちを理解することは難しい」「人形だと足が軽かったので固定の難しさを感じなかったが、模擬患者さんのおかげで難しさを感じた」など、実際に体験することでの援助の難しさを感じていた。

<計画通りにいかない体験>では、「学生同士の練習

よりも患者の体が大きくてやりづらく、思い通りの援助ができなかった」「計画していた時や想像とは違うことを言われた時にすごく焦った」「自分が考えていたことと違うことが起こると対応が難しい」「練習通りにはいかないことを実感した」など、練習や計画していたようにはできなかったという体験をしていた。

<援助での失敗体験>では、「自分のことで精一杯で声かけができなかった」「寝衣の入れ込みが浅く寝衣を引っ張り出すことができなかった」など、援助が十分にできなかったことが表現されていた。

## 2) 体験による学生の気づき

以上述べたような体験から、学生の気づきとして【実体験からの発見】【模擬患者の反応による気持ちの変化】【自己の課題の発掘】の3つのカテゴリーと12のサブカテゴリーが抽出された(表3)。

表3 体験による学生の気づき

カテゴリー	サブカテゴリー
実体験からの発見	自分と模擬患者の捉え方の違いへの気づき
	模擬患者の反応への気づき
	模擬患者の個別性の発見
	臨床や患者のイメージの広がり
	目指したい看護師像の具体化
	看護師に必要な能力の具体化
模擬患者の反応による気持ちの変化	模擬患者の言葉による喜び
	模擬患者との出会いによる心の動き
自己の課題の発掘	自己の技術不足の認識
	臨機応変な対応の重要性
	技術の改善点の明確化
	看護過程の必要性

【実体験からの発見】では、<自分と模擬患者の捉え方の違いへの気づき><模擬患者の反応への気づき><模擬患者の個別性の発見><臨床や患者のイメージの広がり><目指したい看護師像の具体化><看護師に必要な能力の具体化>という6つのサブカテゴリーが抽出された。

<自分と模擬患者の捉え方の違いへの気づき>では、「羞恥心に配慮したが、模擬患者さんからは気にしないから正確な援助をしてほしいと言われた」「私たちに苦痛ではない事も高齢の人には苦痛を感じる事もある」など、自分と模擬患者では捉え方が違う事に気づいたデータであった。

<模擬患者の反応への気づき>では、「寝衣交換をす

る際に、少しきつそうにしていた」「患者さんの表情がこまめに変化している」「少しつらそうに肩を動かしていた。患者さんに負担をかけていると感じた」などのデータであり、模擬患者として対象の反応を観察しながら援助した事による気づきを表現していた。

<模擬患者の個別性の発見>では、「体型に合わせた浴衣選びは今までしていなかったが必要だった」「人によって感じることは異なる」「人それぞれ感じたり考えが違うので、患者一人ひとりに対して考えながら看護を実践しなければならぬ」などのデータであった。個別性については必要性を学んでいても、実感することはなかったが、今回の演習にて模擬患者への援助を行うことで、個別性を実感する体験ができていたようであった。

<臨床や患者のイメージの広がり>では、「本物の患者さんはもっと質問があるのではないか」「自分がしているだけでは分からない現場の雰囲気も分かった」など、演習を通して臨床や患者について具体的にイメージすることができていた。

<目指したい看護師像の具体化>では、「患者さんの微妙な表情の変化に先生は気づいていたので、自分もそうになりたい」「今後も患者さんに喜んでもらえるような看護師を目指したいと思った」など、今回の体験からどんな看護師になりたいのかという将来像を考えることができていた。

<看護師に必要な能力の具体化>では、「患者さんの動き、言動、すべてを観察することが大事だということと共に、看護師間のコミュニケーションも大切だということがわかった」と表現しており、看護師にどのような能力が求められているのかを考える機会になっていた。

【模擬患者の反応による気持ちの変化】には、<模擬患者の言葉による喜び><模擬患者との出会いによる心の動き>という2つのサブカテゴリーが抽出された。

<模擬患者の言葉による喜び>は、「模擬患者さんが気持ちいいと言ってくれてうれしかった」「学生同士で言われるよりも一般の人に言われるほうが勇気が出た」等のデータであった。学生は模擬患者からの直接の反応を得ることができており、その反応から看護の喜びを感じることができていた。

<模擬患者との出会いによる心の動き>は、「応援してくれている気持ちが伝わり、頑張ろうと思った」「また、こんなふう言ってもらえるなら、看護師になる

のもいいかなと思いました」など、模擬患者からの反応から頑張りたいという気持ちや看護師になりたい等のポジティブな気持ちの変化をもたらしていた。

【自己の課題の発掘】としては、＜自己の技術不足の認識＞＜臨機応変な対応の重要性＞＜技術の改善点の明確化＞＜看護過程の必要性＞の4つのサブカテゴリーが抽出された。

＜自己の技術不足の認識＞では、「一つ一つの技術があいまいだった」「今回の演習を通して、自分の技術が不足していることを実感した」など、失敗体験から自分の技術不足について振り返りを行っていた。

＜臨機応変な対応の重要性＞では、「患者さんの状態はいつどのように変化するか分からないので臨機応変に対応」「状況に応じて臨機応変に対応していきたい」など、模擬患者による体験から臨機応変に対応することの重要性が表現されていた。

＜技術の改善点の明確化＞では、「説明を求められたので、看護介入の根拠を十分に理解しておく必要があった」「知らない人とのコミュニケーションをとる時に緊張してしまうので改善しようと思った」などの表現があった。技術について単に技術を実施するだけではなく、相手に説明したりコミュニケーションを行うことも技術の一部であるという認識ができており、その改善点を見出すことができていた。

＜看護過程の必要性＞については、「患者さんがどこまでできるのか判断が重要」「その時その時の患者さんの様子をしっかりとアセスメントしながら行えたらいいと思った」「本当に求めているケアは何なのかをよく考えて実行していきたい」などのデータであった。患者に適した看護を提供するためには患者にとって何が必要なかを明らかにすることが重要であり、その手段としての看護過程の必要性に気づいていた。

3) SPが演習に参加することによって生じた学生の変化

SPが演習に参加することによって生じた学生の変化としては、【視野の広がり】【学習意欲の向上】の2つのカテゴリーと5つのサブカテゴリーが抽出された(表4)。

【視野の広がり】では、＜自己を捉える視点の広がり＞＜自己を捉えなおす機会＞の2つのサブカテゴリーが抽出された。

＜自己を捉える視点の広がり＞は、「自分では気づくことができない事に気づいた」など、今までよりも自己を捉える視点の広がりを実感していた。

表4 SPが演習に参加することによって生じた学生の変化

カテゴリー	サブカテゴリー
視野の広がり	自己を捉える視点の広がり
	自己を捉えなおす機会
学習意欲の向上	看護技術に対する意欲
	演習への意欲
	実習にむけての意欲

＜自己を捉えなおす機会＞では、「自分の特徴がわかった」「作業ばかりに集中してはいけない」等、自己や自分の技術について振り返る機会になっていた。

【学習意欲の向上】では、＜看護技術に対する意欲＞＜演習への意欲＞＜実習にむけての意欲＞の3つのサブカテゴリーが抽出された。

＜看護技術に対する意欲＞では、「技術を習得したいと思った」「しっかり練習して安心をあたえられるような援助ができるようになりたい」「答えられないこともあったので、もっと勉強したいと思った」など、技術を練習したり学習をしたりすることで、看護技術を身につけたいという意欲が増している状況があった。

＜演習への意欲＞では、「上手い出来ないことも想定したうえで余裕を持って演習に取り組んでいきたい」「今後も模擬患者さんが来られる場合には、とても集中して真剣に取り組んでいきたい」など、演習への意欲も向上していた。

＜実習にむけての意欲＞では、「今後の実習で活かしていきたい」「実際の臨地実習で、緊張するかもしれないが、模擬患者で事前の心の準備ができたので実習に活かしたい」など、実習にむけての意欲も向上していた。

## V 考察

SPが看護学実習前演習に参加することによって学生には【臨床に近い体験】【模擬患者からの反応をつきつけられる体験】【思い通りにならない体験】が起こり、【実体験からの発見】【模擬患者の反応による気持ちの変化】【自己の課題の発掘】という学生の気づきへとつながっていた。また、これらの体験や気づきから学生には【視野の広がり】【学習意欲の向上】という変化が生じていた(図1)。

以下、SPが演習に参加することによる学生の体験、SPが演習に参加することによる学生の気づき、SPが演習に参加することによって生じた学生の変化について考察を行う。

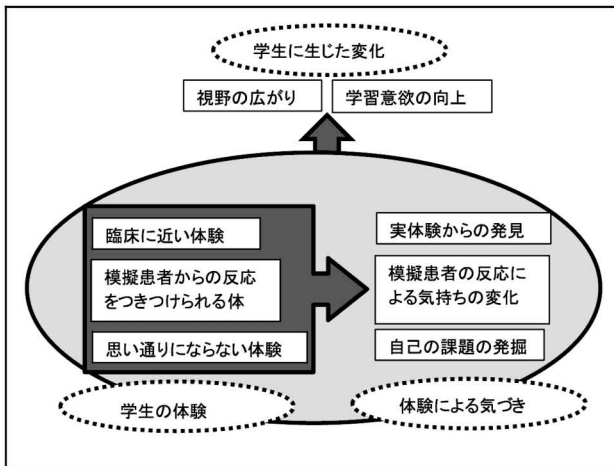


図1 SPが演習参加することによる学生の学びの実際

### 1) SPが演習に参加することによる学生の体験

実習前演習に地域住民がSPとして参加することにより、学生は【臨床に近い体験】【模擬患者からの反応をつきつけられる体験】【思い通りにならない体験】をしていた。これらの体験は、演習にSPを導入したからこそ得られた体験であると考えられた。

最近の学生の傾向として、ライフスタイルの大きな変化による生活体験の不足があげられている<sup>6)</sup>。そのような状況の中で、看護技術の演習でお互いに肌を露出することに対する抵抗感も大きく、下着やTシャツを着用して肌を露出させずに演習を行う学生も多い。しかし今回の演習では、SPが寝衣の下にTシャツなどを着用していなかったため、学生の驚きも大きかったと考えられる。こうした状況下では、プライバシー保護についてより意識して実施する必要がある、「バスタオル1枚で身体を覆えると思って練習したが、実際にやってみるとバスタオル1枚では足りずあわててバスタオル2枚と小さいタオルを追加した」などの「臨場感ある体験」ができたと考えられた。年代の違う対象の肌を実際に清拭したことで、「学生の皮膚とは違いハリがなかった」など「イメージとのギャップ」を体験したと考えられた。また、世代の違う初対面の相手に対して説明を行い、看護援助を実施するということにより「いつもと違う緊張感」を感じていた。これらの学生同士の演習では得られない体験は、SPを導入し【臨床に近い体験】をしたことで得られたものであると考えられる。

学生は今回の演習を通して、「私たちの技術がどうであったか詳しく述べてもらった」「熱いや冷たい、聞こえないなど素直な反応や感想をいただいた」と表現し

ているように、模擬患者からのリアルなフィードバックを受けながら援助を実施できていた。普段の演習では学生同士で実施しているため、お互いに反応を伝えることに躊躇し何も反応を伝えないという姿を見る。また、普段の演習では、習ったことを実施することで精一杯になっていたと思われるが、SPを導入した演習で、SPから直接反応を得てフィードバックを受けることができ、反応を確かめながら援助を実施する体験をすることができていた。藤崎は、SPが参加することの利点を模擬患者からのフィードバックが得られるということである<sup>7)</sup>と述べている。フィードバックを得ることで、具体的にどこに問題があるかを考えることができるため、今回の演習でもSPからのフィードバックによる学生の学びは大きかった。SPに対して感じたままの反応をフィードバックしてもらうよう依頼することは学生の学びを促進することにつながると考えられた。

普段の学生同士の演習では、何をするかをお互いが理解している状況であり、説明や援助に不足があっても問題に感じることも少なかったと思われる。しかし、SPは地域住民であり、看護の知識はないため説明に不足があれば理解は得られず、SPからの質問が出て説明ができないという状況になっていた。また練習ではモデル人形を使用したグループもあり、人形と人体の重さの違いなどから、実際の援助の際に練習よりも難しいと感じていた。そのため、共通理解していない状況やリアルな状況での実施が学生にとって「援助の難しさを実感」する体験につながったと考えられた。リアルな状況から、学生同士の練習とは違った援助になり、「自分が考えていたことと違うことが起こると対応が難しい」「練習通りにいかないことを実感した」など「計画通りにいかない体験」をしていた。また、計画や練習していたようには実施できなかったことで、「寝衣の入れ込みが浅く寝衣を引っ張り出すことができなかった」などの「援助での失敗体験」も体験していた。今までの演習では、患者役も学生であるため、技術に対する反応や失敗もほとんどない状況であった。しかし、SPを導入することで【臨床に近い体験】ができ、行った援助に対して「模擬患者からのリアルなフィードバック」を受け、【模擬患者からの反応を突きつけられる体験】をしていた。【臨床に近い体験】や【模擬患者からの反応を突きつけられる体験】によって、自己中心で行っていた演習とは違い【思い通りにならない体験】をすることにもつながったと考えられた。

## 2) SPが演習に参加することによる学生の気づき

今回の演習で学生は、【実体験からの発見】【模擬患者の反応による気持ちの変化】【自己の課題の発掘】という気づきをもたらされた。

【実体験からの発見】では、【模擬患者からの反応を突きつけられる体験】や【臨床に近い体験】をしたことによって多くの気づきを得ていた。学生は、【模擬患者からの反応を突きつけられる体験】で「模擬患者からのリアルなフィードバック」を得ていたが、SPから直接フィードバックを受けることで「羞恥心に配慮したが、模擬患者さんは気にしないから正確な援助をしてほしいと言われた」などの「自分と模擬患者の捉え方の違い」に気づくことができていた。また、【臨床に近い体験】により、模擬患者の表情や反応を観察しながら援助することができており「模擬患者の反応への気づき」につながっていた。嶋根らは、SPを導入した演習は患者を知り患者の思いを受け止めながら援助を実施するという基本に立ち戻る機会となる<sup>9)</sup>と述べている。今回の演習でも、学生は模擬患者の表情や反応を観察しながら援助することができており、SPを導入した演習は患者の反応を受け止めながら患者を理解し援助を実施するという機会となり、「模擬患者の反応への気づき」を促すと考えられた。その他にも【臨床に近い体験】での「イメージとのギャップ」や【模擬患者からの反応を突きつけられる体験】での「模擬患者からのリアルなフィードバック」により、「体型に合わせた浴衣選びは今までしていなかったが必要だった」「人によって感じることは異なる」などの「模擬患者の個別性の発見」につながったと考えられた。また、【臨床に近い体験】をすることで、今までは分からなかった実際の臨床や患者について考えるきっかけになっており、「臨床や患者のイメージの広がり」にもつながっていた。更に、「目指したい看護師像の具体化」や「看護師に必要な能力の具体化」についても考える機会になっていた。以上より、【模擬患者からの反応を突きつけられる体験】や【臨床に近い体験】は、生活体験の乏しい学生に対して、実際の臨床や患者・看護師について具体的に考える機会になり、【実体験からの発見】に基づく多くの気づきを得ることにつながっていた。

【模擬患者の反応による気持ちの変化】には、【模擬患者からの反応を突きつけられる体験】の「模擬患者からのリアルなフィードバック」が大きく関係していると考えられた。「模擬患者さんが気持ちいいと言って

くれてうれしかった」「学生同士で言われるよりも一般の人に言われるほうが勇気が出た」と学生が表現しているように、模擬患者からのフィードバックによって「模擬患者の言葉による喜び」を感じていた。また、「応援してくれている気持ちが伝わり、頑張ろうと思った」などの「模擬患者との出会いによる心の動き」もあった。

【思い通りにならない体験】からは【自己の課題の発掘】につながっていた。「計画通りにいかない体験」や「援助での失敗体験」などから「一つ一つの技術があいまいだった」などの「自己の技術不足の認識」ができており、自己の看護を振り返り、「状況に応じて、臨機応変に対応していきたい」という「臨機応変な対応の重要性」の認識につながっていた。また、技術について振り返ることで「技術の改善点の明確化」にもつながっていた。これらのことから、多くの失敗体験は、単に失敗したということに留まらず、自己の課題や技術の改善点などの認識につながっていることが明らかになった。また、失敗体験は、「臨機応変な対応の重要性」や「技術の改善点の明確化」のためには、「本当に求めているケアは何なのか、よく考えて実行していきたい」などの「看護過程の必要性」にもつながっていた。本田らはSPの活用によって、学生は看護のリアリティを疑似体験し、SPの創り出す現実には否応なく巻き込まれ、感情を揺さぶられる体験をする<sup>9)</sup>と述べている。学生はリアリティを疑似体験することで、【臨床に近い体験】【模擬患者からの反応をつきつけられる体験】【思い通りにならない体験】をし、これらの体験が学生の感情を揺さぶり、その結果、【実体験からの発見】【模擬患者の反応による気持ちの変化】【自己の課題の発掘】といった、多くの気づきをもたらしていると考えられた。

## 3) SPが演習に参加することによって生じた学生の変化

上記のような体験や気づきによって、学生には【視野の広がり】【学習意欲の向上】といった変化が見られた。

【視野の広がり】では、【模擬患者からの反応を突きつけられる体験】での「模擬患者からのリアルなフィードバック」を受けることで「自分では気づくことができない事に気づく」ことができており、演習前よりも自己の課題や改善点が具体的に見えており「自己を捉える視点の広がり」を実感していた。城戸らは、SPという限りなく患者に近い存在を相手に複数の看護活



動を展開した経験から、より多角的に患者を捉え、計画も具体的に考えることができるようになった<sup>10)</sup>と述べている。今回、SPを演習に導入することで学生同士では再現できない【模擬患者からの反応を突きつけられる体験】ができており、この事が、学生の視野を広げることに繋がったと考えられた。また、肥後らは、SPからのフィードバックは直接、自分の励みや気づきになる<sup>11)</sup>と述べている。今回の演習でも、<模擬患者からのリアルなフィードバック>により自分だけでは気づけない多くのことに気づくことができていた。また、SPを導入したことで体験や気づきから、「自分の特徴がわかった」などの<自己を捉えなおす機会>にもなっていた。

今回の演習では、多くの学生が<計画通りにいかない体験>や<援助での失敗体験>などをしていった。また、失敗だけでなく<模擬患者からのリアルなフィードバック>から<模擬患者の言葉による喜び>を得ていた。その結果、失敗したという体験で落ち込むという事だけではなく、喜びを感じており、次はもっと上手になりたいという今後への意欲につながったと考えられた。SPを導入した演習を行うことによって【自己の課題の発掘】にも気づけており、その結果、<看護技術に対する意欲><演習への意欲>などにつながっていた。このことから【思い通りにならない体験】をするからこそ【自己の課題の発掘】につながり、【学習意欲の向上】につながっていると考えられた。また、SPを導入した演習を行うことで、<臨床や患者のイメージの広がり>ができたため、実習についても考える機会となっていた。【思い通りにならない体験】は、「今度の実習で活かしていきたい」「今回の学びを、今後の実習につなげ、より良い看護ケアを目指していきたいと思う」など、今回の学びを実習で活かしていきたいという思いを引き出していた。その結果、<実習にむけての意欲>につながったと考えられる。

## VI 研究の限界と今後の課題

本研究は、SPが実習前演習に参加することによる学生の学びの実際を明らかにすることを目的とした研究である。今回の研究では、無記名自記式質問紙調査の自由記述に対する質的内容分析であり、学生の学びの概要を明らかにすることはできたが、個々の学びの詳細については明らかになっていない。今後は本研究を基に演習の方法と学生の学びの関連について学生に対してインタビューを行い、SP参加型教育が学生の学び

にどのような影響を与えているのかを明らかにしていく必要がある。また、演習の方法と学びの関連について更に分析を進め、本学におけるSP参加型教育の指針を明確化することが今後の課題である。

## VII 結論

本研究では、SPが演習参加することにより以下のような学びの実態があることが明らかになった。

- 1) SPが演習に参加することによって学生は【臨床に近い体験】【模擬患者からの反応をつきつけられる体験】【思い通りにならない体験】をしていた。
- 2) 学生はSPが演習に参加することによって【実体験からの発見】【模擬患者の反応による気持ちの変化】【自己の課題の発掘】といった気づきを得ていた。
- 3) これらの体験や気づきから学生には【視野の広がり】【学習意欲の向上】といった変化が生じることが明らかとなった。

## VIII 謝辞

ご多忙の折、快く研究にご協力いただいた、SPの皆様や学生に感謝申し上げます。

なお、本研究は平成23年度日本赤十字九州国際看護大学奨励研究費助成を受け実施した。

受付	2013. 8. 7
採用	2013. 11. 20

## 文献

- 1) 本田多美枝、上村朋子：看護基礎教育における模擬患者参加型教育方法の実態に関する文献的考察 - 教育の特徴および効果、課題に着目して - . 日本赤十字九州国際看護大学 Intramural Research Report、7 : 67-77、2009.
- 2) 前掲 1)
- 3) 江川幸二、グレッグ美鈴、沼本教子、二宮啓子、岩本里織、登喜和江、吉田こずえ：看護大学における地域住民ボランティアを導入した授業の評価 - 学生の感想・意見から - . 神戸市看護大学紀要、15 : 57-66、2011.
- 4) 加悦美恵、飯野矢住代、河合千恵子：基礎看護学における SP 参加型の授業と臨地実習の連繫 - 学生の臨地実習の体験のふりかえりから - . 日本看護科学会誌、26(2) : 67-75、2006.
- 5) 阿部オリエ、小手川良江、本田多美枝、吉村恵、堀

井聡子、柳井圭子：看護学実習前演習に地域住民が模擬患者(simulated patient: SP)として参加することの意義に関する研究. 日本赤十字九州国際看護大学紀要、11：49-58、2012.

- 6) 軸丸勇士、伊藤安浩、大森美枝子、田代恵、照山勝哉、洲崎洋昭、藤谷将誉：児童生徒や学生の生活体験不足と今後の実践的課題 体験の調査を通して. 生活体験学習研究、6：29-42、2006.
- 7) 藤崎和彦：アメリカの医療教育における模擬患者の導入の現状とその理論. 看護展望、18(8)：892-896、1993.
- 8) 嶋根久美子、瀬瀬 美保子、榎本 康世、瀧泉、牧田まり子、渡辺暢子：看護教育における学内技術演習の検討-模擬患者への基礎看護技術演習の効果-. 日本看護学会論文集 看護教育、36：12-14、2005.
- 9) 前掲1)
- 10) 城戸滋里、猪又克子、本戸史子、岡崎寿美子：看護基礎技術演習への模擬患者(SP)導入に関する学生の評価. 北里看護学誌、8(1)：38-47、2006.
- 11) 肥後すみ子、奥山真由美、太湯好子：SP 導入によるコミュニケーション演習に基づく学習効果と教育技法の評価. 岡山県立大学保健福祉学部紀要、12：33-43、2005.

## Report

### Nursing students learning outcomes after the introduction of simulated patients (SP) in preparation for clinical practicum: Focusing on nursing students perceived experiences

Yoshie KOTEGAWA, RN, MN<sup>1)</sup> Oriie ABE, ORN, MEd<sup>1)</sup> Tamie HONDA, RN, PhD<sup>1)</sup>  
Keiko YANAI, RN, PhD<sup>1)</sup> Mayuko UTSUNOMIYA, RN<sup>1)</sup> Sakiko NAKAHIRA, RN<sup>1)</sup>  
Chiharu TANAKA, RN<sup>1)</sup> Tae KANAMARU, RN<sup>1)</sup>

The present study aimed at clarifying the learning outcomes of nursing students who experienced interaction with community residents acting as simulated patients (SP) during pre-clinical laboratory practicum.

Self-administered questionnaires were distributed to 106 out of 125 students enrolled in the nursing process laboratory practicum, who consented to participate in the study (response rate: 84%, valid response rate: 100%). We conducted qualitative content analysis of responses provided to open-ended questions.

Three general themes were identified from the results: 1) 'students experiences of SP participation in laboratory practice', which included 4 categories: "experiencing closeness to clinical settings", "experiencing simulated patient's responses", and "experiencing that things don't go just as we expect" and 7 subcategories, 2) 'students' perceptions of self' was extracted from 3 categories: "experience led discoveries", "emotional changes due to SP patients reactions", "realizing one's learning tasks/difficulties" and 12 subcategories; 3) 'changes experienced by the students', was extracted from 2 categories: "broadening one's perspective" and "increasing one's motivation to learn" and 5 subcategories.

Based on the present study, we plan to conduct further research with a larger sample size to improve reliability and appropriateness. We expect these results to contribute to the draw up of guidelines for SP participation-based education in our institution.

**Key words:** simulated patient, community resident, pre-clinical practicum, nursing student

---

1) The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing